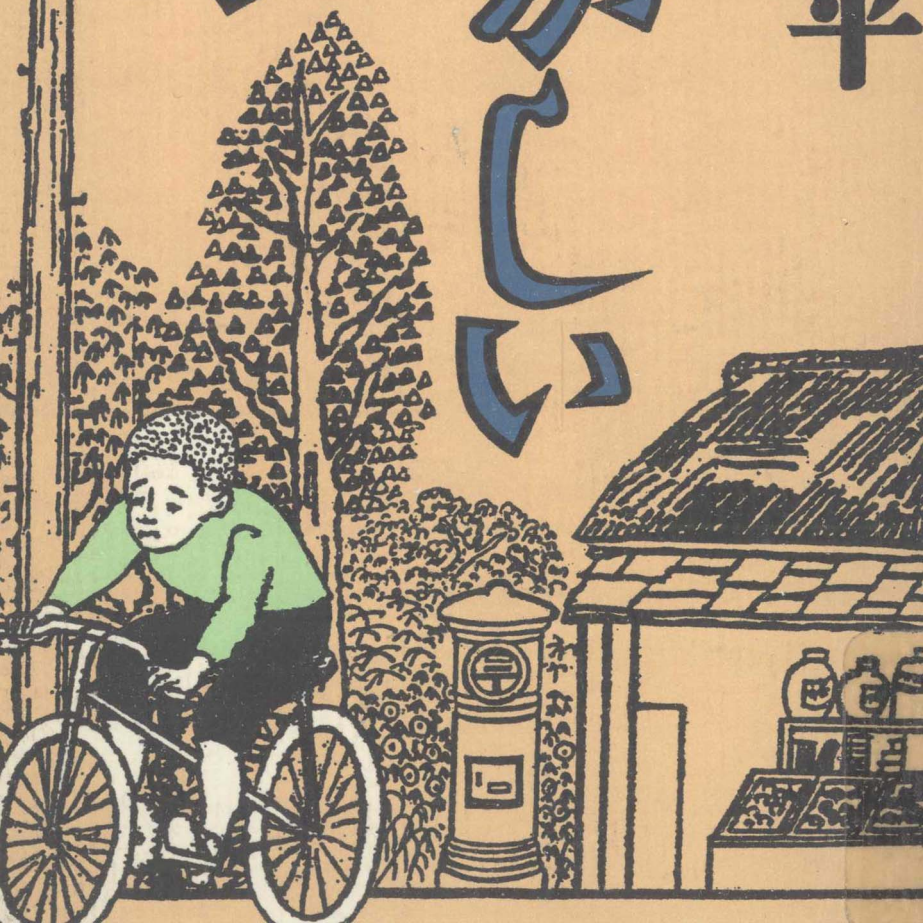


杉浦明平

となつかい
大正



杉浦明平

なつかしい 大正



福武書店



なつかしい大正

一九九一年六月二〇日 第一刷印刷
一九九一年六月二五日 第一刷発行

著者 杉浦明平

発行者 福武總一郎

發行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二―三二八

〒103 電話〇三―三三〇一―三三

振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷・製本 図書印刷
平版印刷 栗田印刷

(落・乱丁本はお取替え致します)
(定価はカバーに表示しております)

杉浦明平(すぎうら・みんべい)
一九一三年、愛知県に生まれる。三
六年、東大国文科卒。在学中、立原
道造、寺田透らと同人雑誌「未成年」
を発刊。敗戦後、郷里渥美に住み、
五五年より八年間町会議員をつつ
け、その間の体験を痛烈な風刺精神
でつづった「ノリソダ騒動記」は記
録文学の傑作である。また「小説渡
辺華山」で毎日出版文化賞を受賞。
小説、評論にと多彩な活躍をつづけ
ている。著書には「ルネサンス文学
の研究」「秘事法門」「戦国乱世の文
学」「小説渡辺華山」「失踪記」「ボラ
の映笑」「泥芝居」などがある。

なつかしい大正
目次

農村散策

7

峠への道

25

消えた畑道を求めて

53

松の木は枯れたのか

97

なつかしい大正

118

父の伝説

134

植林哀話

166

おにやら百まで

189

冬の終り

203

装丁 田村義也

なつかしい大正

農村散策

九月十五日敬老の日わたしは孫娘二人からプレゼントとして万歩計をもらった。じつは数年前にわたしより二つ若い東京のNさんが万歩計を腰に下げて一日一万歩歩くことに努めているという話をきいたことがある。駒込のWさんから「今日はしぐれが去来しているのに突然Nさんが訪ねてきた。何ごとかと思ったら、『一日一万歩を達成するために今日は富坂の自宅から北東の方へ約五千歩歩いたらあなたのお宅近くにまで来てしまったのでちょっとお話ししたくなって』と久しぶりでしゃべっていったよ」という電話をもらった。一万歩の目標を達成するためににはしぐれなどには怖れずあえて駒込まで歩くとはいかにもNさんらしいなあわたしもWさんにいったものである。

しかし万歩計そのものをみるのは初めてのことだ。孫たちの贈りものは二人の小遣いからへぎ出して求めたものだから、ごく簡単に、何に一番よく似ているかときかれたら、子供のおも

ちやの腕時計と答えるよりほかはない。文字盤は黒いゴチック体の数字で十区に分けられ、一区は十の狭い刻みがあり、尖端だけが赤い色で目立つごく細い針が十歩に一刻みずつ進んで、10の字に戻ると、一万歩ということになる。しかしはじめは手に取っておもちゃみたいに眺めたうえ、付属している吊り紐にバンドを通して腰にぶら下げたのであった。

胃の手術をしてから一年十カ月余りがたっていた。退院してはじめは自宅で毎朝注射と点滴をうけていたが、間もなく一週間に一回、やがて二週間に一回、今では四週間に一回、診察を受け四五種類の薬をもらってくる。一年前は病院にゆくごとに、レントゲン、心電図、採尿、採血検査、胆嚢エコー、そして半年に一回スキャナー室の台の上で風洞みたいな装置の内に仰向けになってCT撮影を受けねばならなかったけれど、今では尿の検査と、診察、稀に採血されるだけである。退院したころには左右の腕とも静脈という静脈は上膊から手の甲に至るまで注射、採血、点滴の針のために硬化して老練な看護婦といえども針を刺すべき余地がなくて、出血しては何回もさぐっては刺し直さねばならなかったのに、いつか静脈もやわらかくなって掌をきつく握りしめれば青い血管がふくれ上がつて血を吸い取るのも容易になった。

といっても切りとった胃袋が再生するわけではない。残存する四分の一の胃は拡張したし、十三針の創痕や三カ所の傷穴も新しい肉が盛り上がってきたけれど、食事後はゴム風船のようにふくれた元胃の残骸に食べものがつまって腹が張ってゲップもガスも出ない苦しさ。三十分

から一時間はベッドにどんと引っくり返って元胃袋にたまったものが腸に下りてゆくのを待たねばならない。それどころか、そばやソーメンを噛まずに景気よくつるつるとすり込んであと二、三回で食べ終りそうになったとたん、腹の中がいっぱいにつかえて……ぬるま湯か水を飲んでも下に入ってゆかず、ゲップも出ない。目を白黒させてうなる。女房が背中を撫でたり、脊椎の急所を指で圧したりしてくれるけれど、胃腸につまった物体はぜんぜん蠕動しようとしなない。わたしは椅子から立ち上がって室内を歩いてみたり、二、三回跳び上がってみたり……しかし胃腸はつまりつきり。二階に這い上がって、寝台に仰向けになって、しばらく冷や汗を流しながら呻きつづける。五分か十分たつと、やっとゲップが出る、元胃袋にたまっていたものが腸の方に移っていったらしく、腹が軽くなってゆく。

「散歩がいいですよ」と医師にいわれたから、食後一時間ほど横になったのち、わたしはまず直線で百メートル前後だが、途中に家ができたために百五十メートル近くになる自分の菜園まで往復することにした。中腰で鋤を使う農耕作業は心臓をはじめ内臓を圧迫するからやめるように忠告されていたから、野菜や果樹の間を歩きまわり、木の枝を切ったりときに腰掛けに腰かけて草を抜いたりするきりで引揚げる。一年半のわたしの運動はそこまで。全部でせいぜい三百メートルの散歩であった。

が万歩計を腰にぶら下げて畑に往復してみたところ、針はちょうど二百歩しか示していない。足の短いわたしは一メートルを二歩以上かかって歩くはずなのに、往復三百メートルのほ

か、畑の中を何回もあちこちするのを加えれば五百歩前後を表示してもいいのではないか。いずれにせよ、「歩きなさい。走ったり急な坂道を急いで上ったりしてはいけないけれど、散歩なさい。便秘にもきき目があります」という医師の指示に従って、雨や風でない日の夕方に努めて畑まで往復したけれど、どうも二、三百歩の散歩ではたいして効果はなさそうである。

万歩計を腰のバンドにぶらさげるようになったのは、秋の彼岸のころだった。

わたしはとうに上顎の方は総入れ歯になっていた。下顎の方は前歯が四五本、左右の奥歯が金冠か銀冠か見たことがないけれど、左右に二本ずつ残っていて隙間はブリッジ式の義歯で補われていた。ところが入院中、食事ができるようにになると、残っているどの歯も一せいにぐらぐら揺れはじめたし、ブリッジ式義歯は上の入れ歯と噛み合わせがわるくなって、舌を噛むことがときどき起こり、その回数が増えだす。歯ぐきの土手が痩せて入れ歯とびったり合わなくなつたのであろう。わたしは若い友人に託して、これをはめてくれた町の歯科医に修理方を依頼したところ、「当人の歯を診なくては修理はできません」という返事だった。なるほどそうに違いないと、わたしはブリッジ式の下義歯を入れ替えた。もっとも義歯も乾燥させると形が変わるといので、紙コップにその義歯を入れて枕元に置いて、水の切れぬよう女房に水を注がし、退院後はその義歯入りコップを洗面所に置いてやはり水を絶やさぬように補給しつづけた。とはいえ、入れ歯をはずすということはものを食べるのに不向きなものであった。退院して元氣回復次第、車で歯科医院に運んでもらおうと希いながら、家に戻って一年あまり、

二度目の春がすぎ夏が終ろうとしても、歯科医院に通う気力が湧いて来なかった。

ところがある日突然右下顎の奥から三番目の歯——一番奥が親知らず、次が大臼歯、三本目は小臼歯と呼ぶのだろうか——の歯ぐきがじーんと痛み出した。指を入れて揺さぶると、ぐらぐらとして小さな快感を伴う痛みが顔面全体を走り抜ける。そして舌の尖端でさわったり、また指で動かしたりするうちにいつの間にか歯ぐきが腫れ上がり、右頬もお多福風邪みたいにくれて、痛覚は骨髓を覆ってしまふ。歯槽膿漏に違いなかった。夕方には他の歯にまで痛みが伝わって晩飯を摂ることもできず、熱も出て三十七度を超える。翌朝知人のつて、でもっとも近い町の歯科医に頼んだら午後二時に来るようにいわれた。息子の車で歯科医院へゆくと、歯科医は痛む奥歯を揺すぶっていたが、「これはすぐ抜けますよ」とていねいに痛み止めの注射をしたうえ、小さな釘抜きをもってガリガリと引っこ抜いてしまった。その日は電話をかけて迎えにきた車で帰宅した。

翌朝はもう熱も痛みもなく、空っぽになった歯のあとを舌でなめまわしながら、また息子の車で出かけて、歯型を取ってもらった。が、その帰りは、自分の足で歩くことに腹をきめていた。秋の彼岸をすぎたばかりで、晴れ上がっていても、日ざしは強くなく、歯科医院を出たわたしは、青竹の杖をついて、まず狭くて車の多い町道を避けて、かなりけわしく曲りくねった坂道を上るコースをえらんだ。狭いF湾に注ぐM川に沿うて発達した古い港の一筋町は、新しく田んぼの中にひらけたショッピングセンターを中心とするバイパスに昔の繁昌を奪われて今

では町並はしもた、屋か年寄りたちがひっそりと昔の商売を守る店だけしか並んでいないのに、それでも車の往来は繁くすれちがいに側溝のコンクリート板の隅に自分の体を押し付けねばならぬ恐れが多かったからである。もともと町そのものが小さなM川の堆積地にできていたから、普通の畑地とは五郎兵衛坂、代官坂、汐見坂等々いくつかの坂によってつながれている。わたしは、心臓もよくないから、上りは苦手なのだが、ともかく齒科医院を出ると、二十メートルも距っていない坂を南へ上ることにした。この港町そのものは昔から陣屋の所在地でこの半島の西半分の中心地になっていたけれど、わたしの家から一キロ以上距っていて、小学校も別だったから、少年倶楽部の入荷する日以外にこのあたりまで来ることはめったになかった。そのうえ小遣い銭がなかったから、町のハイカラな菓子屋なども縁がなかった。四十年前田舎に引揚げてからは、政党员として選挙のさい宣伝カーに乗って街頭演説もよくやったし、町政報告会場たる保育園にしばしば、そして町会議員になってからは、坂の上にある町役場に毎日のように通って、道側の商店のおかみさんたちとは親しくなったけれど、そのときはすべて自転車を利用したから、自転車をとめて短い雑談をかわすのがせいっぱいだった。坂道は上りは呼吸をはずませてペダルを踏まねばならなかったし、下りはブレーキを思いきり強く抑えつけて路面にひたすら注意を集中しなければならなかったせいで、坂の両側の家などがめっている余裕がなかったにちがいない。ただ自分が上りはじめた代官坂（ひょっとしたら五郎兵衛坂）が、昔の記憶では、到るところ赤土の崖肌を露出していて、ときどき黒く焦げた粉粒の一つまみや

縄文土器のかけらがまじっていたのに、今ではきれいな石垣積みか、排水孔をたくさんつけたコンクリート壁で固められており、どの家も入口に低い門と車庫を備えて婦人雑誌のグラビアみたいに清潔で中流の上風の住宅になっていた。わたしにはたぶん生まれて初めて通る坂道だが、どこにもある景色でもあった。それでもわたしはかなり強い傾斜をはすかに歩いて、何度もカーブしたとき、目の前に鬱蒼とした木々の茂りがあらわれた。かなり風化した御影石の門はしまったままで、その向うには昔は庭木だったらしいもろもろの樹木がほしいままに押し合いへし合い茂っている。といっても秋づいた光の下では群葉も下の部分は緑が白茶けたり赤茶けたりかなり褪色して耀きも艶も薄らいで、すかすかとした枝や幹の間から奥の方に小屋か古い屋敷のようなかたまりが透けて見えないではない。

この坂のあたりは代官陣屋と村役人の住居があったのかもしれない。海辺に下りてゆく傾斜地を平らにしてすこし上の台地に代官様が陣屋を構えていて、この一角も御維新後もこの半島の旧家の屋敷だったのだろうか。そういえば、わたしの小学生のころ、洋装断髪の若い婦人が日傘をさして運動場に沿うた県道を通ってゆくのを見たりおぼえがある。「わっ、……が通るぞ」と一人の子供が声をあげると、男の子も女の子も一せいに喚き声をあげながら、道の方に駆け寄って、罵声をあげる。中には小石を拾って投げつける男の子もいた。雨の降らぬ日中、傘をさしてゆく女をわたしも初めて見たし、その彫刻のように彫りの深い顔の若い女が小学生の喚き声にも罵り声にも、また、礫をも相手にせず、大粒な眼をまじろぎもせずまっすぐ

前に向けたまま歩調もかえずに歩み去ったことがいつまでも印象に残っている。大人たちの話を総合すると、あれは元大庄屋の孫娘で、父親は青年時代に自由民権の闘士で飯田事件で検挙されたこともあるけれど、その後何とかという療法を創案、東京新宿のパン屋夫婦や社会主義作家木下尚江などの名士から新興宗教の開祖みたいに心酔されているげな、あの娘は東京のモガの風俗をしているというわけであった。

その後わたしは、豊橋の町角でふとしたはずみにその新式療法を開いたA氏を見かけたことがあるような気がしてならぬ。しかしそのA氏の伝記を検したところ、A氏の没年は大正九年（一九二〇）であるから、あるいは何か雑誌の広告ページに載っていたA氏の写真がわたしの記憶にまぎれ込んだのかも知れぬが、ともかくでっぶり肥った教祖らしからぬ人物だった。それはともかく享年五十何歳で、無病息災療法の開発者でなくても、長命とはいえぬなあと思った。ところが敗戦後わたしが田舎にもどってから、あの女性が時折県道を乳母車を押してゆったり歩いてくるのを何度も見かけた。昔のまま断髪で鮮明な顔立ちに大きな眼を見開いて真直ぐ前を見つめたまま、すれちがう人に一顧も与えず、黙って通り過ぎてゆく。年齢は昔とほとんど違ったように見えないけれど、開いたつぶらな眼に光が乏しく、うつろな翳がただよっているような気がした。もっとも小学生たちが見世物見物のように駆け寄ってくることも小石を投げることもなかった。敗戦後はアメリカ兵もたくさんやってきたし、都会から買出し部隊も押し寄せた。それらの群は潮の干くように引揚げてしまったものの、断髪さんはわたしのよう